

आयुस्、あーゆす

(発行) 京都文教大学図書館
京都文教短期大学図書館／京都府宇治市横島町千足80

謎の少女歌劇団をめぐるご縁の話

京都文教大学・京都文教短期大学図書館長
総合社会学部 教授(社会学、大衆文化論) 鶴飼正樹

日本少女歌劇座という少女歌劇団のことを調べている。大正後期に誕生し、昭和30年代前半まで、アジア太平洋戦争をはさんで35年以上にわたって活動した、旅回り専門の少女歌劇団だ。

関心を持ったきっかけは、今から20年ほど前に古本市でみつけた絵はがきだった。店頭で絵はがきをあさっていると、舞台化粧をした少女たちのプロマイド風絵はがきが、まとまって売られているのが目についた。その表情や恰好が、なんとも垢抜けていず、不思議な雰囲気をかもし出していた。劇団名は「日本少女歌劇」。聞いたことがない謎の少女歌劇団だった。

年賀状や暑中見舞いも混じっていて、大正15年の正月公演は熊本市の劇場なのだが、劇団事務所の所在地は奈良の大和郡山となっている。またある年の年賀状には、1月は中国・四国、2月は九州南部、3月は山陰を巡業予定と書かれている。こうしたことから、大和郡山を拠点に全国を巡業した少女歌劇団らしいと思われた。

その後、古本屋の目録でこの劇団の資料を見かけるたびに買うようになったのだが、いかんせん、数年に一度あらわれるぐらいの出現頻度のうえ、抽選に落ちることも少なくなかったため、探索はいっこうにはかどらなかつた。

7年前の夏休み、思い立って、大和郡山市立図書館を訪ねた。カウンターで「大和郡山に拠点があつた少女歌劇団のことを調べているのですが」と切り出してみても、館員さんたちはまったく知らない様子だった。それでも、郷土資料コーナーの『大和郡山市史』にたった1行、少女歌劇団とそれを率いた人物についての記述を発見し、一条の光が射したようだった。

大きく動き始めたのは、その2年後のこと。軽い気持ちで置いて帰った名刺を見て、図書館長さんが、電話をくださったのだ。市民から寄贈された資料の中に、少女歌劇団らしい写真がたくさんみつかったという。

確認してみると、昭和10年代から20年代と思われる写真が数百枚。プロマイドや舞台写真だけでなく、台湾や朝鮮で撮影したという裏書きのあ

る写真もあれば、忠臣蔵や弥次喜多、桃太郎など、演目がわかる写真もある。まさに、謎の少女歌劇団の全貌がわかる資料だった。

そこからは、大和郡山市内に劇団本社の建物が現在も残っていることがわかったり、1年分の公演チラシを古本屋で入手したり、元劇団員の方や関係者のご遺族にお話をうかがえたりと、奇跡的ともいえるご縁に恵まれて、一気に取材が進んでいった。そしてこの8月には、図書館に併設された展示ホールで、「旅する少女歌劇団 日本少女歌劇座展」と題した資料展を開催することができた。少女歌劇という夢の舞台を全国に届けた劇団が大和郡山にあつたということ、ぜひ地元の人に広く知ってもらいたいとの思いが、かなえられたのである。

資料展は好評で、多くの来場者があつた。来場者の中には、若いころに舞台を見たとか、関係者の遠縁にあたるとかいった方もおられ、そこからまた、研究が展開していきそうだ。

展示期間中に、大和郡山の市民劇団・古事語り部座による、少女歌劇をモチーフとした「郡山ラプソディ 麗しの20世紀少女歌集」が上演されるという、おまけもついた。というより、古事語り部座の公演のおまけとして、資料展が開催されたという方が、正確かもしれないが、これも、劇団の演出家である松村武さんが、日本少女歌劇座の存在に注目して下さつたからだ。しかも、劇中の音楽は、私の古くからの知人のサキタハヂメさんが担当している。

地元でも忘れられた謎の少女歌劇団という、それこそ歴史の重箱の隅をつつくような研究が、人と人をつなぎ、地域文化の見直しにもひと役買うことになつたわけで、ここでもまた、ご縁に恵まれたという思いを強くした。

本学図書館長としては、そこに図書館がかかわつていたことも、うれしい。ちなみに、大和郡山市立図書館長の奥さんは、本学図書館の職員さんと大学の同級生で、これも謎の少女歌劇団が結んだご縁のひとつである。

(うかい まさき)

前京都文教短期大学学長・名誉教授（音響科学） 安本 義正

宇治キャンパスの楠木広場（中央ロータリー）の楠木の東側にモダンな鐘楼があり、「総願の鐘」が吊されている。この総願の鐘は、1996（平成8）年に、京都文教大学が開学された記念のモニュメントとして、大河内良孝初代学長の発案によって設置されたものである。銘文には、人間はいかに生きるべきかを説いた四弘誓願「衆生無辺誓願度・煩惱無数誓願断・法門無尽誓願学・佛道無上誓願成」の28文字が選ばれ、鐘の中央部分の「池の間」に刻まれている。「四弘誓願」は仏の道を求めるすべての人々が等しく誓う総願を意味していることから、鐘の名称は、大河内学長によって「総願の鐘」と命名された。

開学年の大晦日から毎年「除夜の鐘」が撞かれているが、一昨年から、より多くの人に撞いていただくとう、午後1時から3時までの「大晦日の鐘」に変更した。その結果、多くの高齢者や幼子連れの方々が来られるようになった。通常「除夜の鐘」では、多くの寺院で108回撞かれるが、これは私たちの108の煩惱を消除するためとも言われている。108の煩惱の数え方には諸説あるが、筆者が一番気に入っている説を紹介しておこう。人間には貪（欲の深いこと）・瞋（腹の立つこと）・痴（道理をわきまえないこと）・慢（おごった気持ちになること）・疑（疑うこと）・見（正しい考えをしないこと）の六心（邪悪な心）が、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根（六つ感覚器官）にそれぞれまわりついており、 6×6 で36通りになる。それが、過去・現在・未来の三界に及ぶことから、 $36 \times 3 = 108$ となるというものである。他には、仏教における「四苦八苦」からきているという説で、数字を当てはめると、 $4 \cdot 9 \cdot 8 \cdot 9$ となる。 $4 \times 9 = 36$ と $8 \times 9 = 72$ を加えると108となるというもので、偶然としても面白い説である。

さて、鐘の役割というのは時代と共に変化しており、仏教教団生活を規制するためのものから、寺院の存在を顕示するためのものとなり、鐘も大

きくなった時期がある。さらには、一般大衆と仏教の繋がりを深め、大衆への布教活動の一環として、寺院で撞かれる鐘の音を「仏の声」として聴いて欲しいとの願いから、決まった時刻に撞かれるようになり、時報鐘用途が付加されてきたという経緯がある。鐘の音は「悪道を撤する」「魔力を降伏させる」「迷いを散じる」「菩提正覚を成就する」という、仏の声であると言われている。人々に幸せに生きて欲しいという仏の願いが込められているのである。とは言え、大切なのは、私たちが「鐘の音は仏の声」として信じて聴けるかどうかである。

筆者の調査では、鐘の音を聴いた人からは、心情として「心が落ちつく」「心がやすらぐ」「心がおだやかになる、和む」など、心癒される音であり、情景としては「静かな山寺」「夕暮れ・夕焼けの風景」「田舎の風景」などの、心の原風景であることがわかった。しかし、鐘の音も私たちの日常生活とは縁が薄くなってきているように感じるこの頃である。最近では、騒音問題も生じている。何とも悲しい世の中になってきたものである。

キャンパス内の総願の鐘が、いつまでも、心癒される鐘・心の原風景として、そして、「仏の声」として、キャンパス内に響き渡ることを祈るばかりである。

最後に、鐘にまつわる面白いエピソードを一つ紹介しておきたい。相対性理論で有名なアインシュタイン博士が、1922（大正11）年に知恩院に立ち寄ったときのことである。知恩院には大鐘があるが、博士が、鐘の真下では音波が相殺して無音の場所が出来ることを実験で証明したというのである。実際には完全には無音にはならないが、鐘の真下では確かに音の強さはかなり減少する。筆者は、宇治キャンパスの総願の鐘で実験し、その現象を確認した。皆さんも一度確かめてみられては如何？

合掌

（やすもと よしまさ）

🌸🌸🌸🌸 これからの若者(子ども)の読書に想うこと 🌸🌸🌸🌸

臨床心理学部 教授(国語科教育、教師教育) 橋本京子

「読書は人生の全てが、決して単純でないことを教えてくれました。私たちは複雑さに耐えて生きていかなければならないということ。人と人との関係においても。国と国との関係においても。」

この文章は、1998年第26回国際児童図書評議会(IBBY)ニューデリー大会によせて、美智子上皇后のビデオによる基調講演をまとめた「橋を架ける」の一節です。同時に

「本の中で、過去現在の作家の創作の源となった喜びに触れることは、読む者に生きる喜びを与え、失意の時に生きようとする希望を取り戻させ、再び飛翔する翼をととのえさせます。」

と綴られています。20年の時を超え、この言葉の重みを深く感じずにはいられません。まさに、今と未来を生きる若者や子どもたちに伝えたい言葉です。社会の変化は加速度的で、ますます複雑・不透明になり、担わなければならないこと、問題解決が容易でないことが年々多くなっています。「複雑さに耐え生きる」とは、困難に直面した時、あきらめたり極端な思考に走ったり、思考停止したりするのではなく、複雑さ・困難さを受け入れて「再び飛翔する翼」をもちレジリエントに生きることではないかと思います。そして、その土台づくりを読書は担っていると考えます。

しかし、刺激的なゲームやユーチューブ、スマホに浸る時間の多い子どもたちの生活に憂慮の感を禁じ得ません。

今では当たり前になった「朝の読書」を経験してきたはずの高校生の不読者率は約55.8%(H30全国学校図書館協議会調査より)となり、小中学校で培ってきた読書習慣が有名無実の状況になっています。読書を巡る課題は新たな局面を迎えています。かつて学校の片隅にあって暗く埃っぽかった図書室が、「朝の読書」の活性化、「子どもの読書活動の推進に関する法律」^{あいま}制定と相俟って、学校教育活動の中核を担う存在になった一方での課題です。

また、これからAIやIoTの進展、Society5.0の到来を迎える中で、「読書」の重要性・必要性を見

つめなおし再確認しなければならない時代に来ていると感じます。多様で膨大な情報が飛び交い、瞬時に判断を求められる時代だからこそ、その思考や判断・表現の基盤を培うために、本(言葉)と向き合い熟考熟慮する知性、本(言葉)の中に心躍らせる感性や想像力、人生と社会を豊かにする人間性や意思を、サイバー空間に浸る若者や子どもたちに、人間の根っことして育まなければならないと感じずにはいられません。

一方、子ども達に本を読む力が育ってないという指摘もあります。基礎的読解力判定のリーディングスキルテスト(「AI vs教科書を読めない子供たち」新井紀子より)に見られる読解力の低さは、AI時代に必要な人間独自の能力の問題として大きな課題になっています。じっくり筋道立てて読み込んでいく力は、不断の言葉(本)との関わり、読書習慣を通して育まれていくものだと考えます。

こうした喫緊の課題解決のために、その不断の関わりをどう構築していくか考えるとき、かつて不遇の時代を乗り越えてきた日々の歩みを基盤に、転換期ならではのしかけを、様々な角度から模索していくことが求められているのだろうと思います。

そんな大きな課題を前に、私にできることは何だろうと問う時、今できることは地道な歩みの一翼になることではないかと考えます。これから社会人となり、親となり、未来を担う若い世代に読書の楽しさ、喜び、深さを伝えること。「自分の中に、しっかりと根を持つために」「喜びと想像の強い翼を持つために」(前出「橋を架ける」)、スマホと同じように、いつも鞆に本を携えること、本の世界を旅すること、味わうこと、そんな読書の魅力や在り方を私なりに発信できればと考えます。

せめて、本を手にすることが「かっこいい大人」という雰囲気や社会の中で醸成するために、今日も鞆に本を携え、電車の中で美しくページを繰ることから始めたいと思います。

(はしもと きょうこ)

1 1 1 私のすすめる3冊(私の推薦図書) 1 1 1

幼児教育学科 講師(乳幼児保育、幼児教育学) 蜷 川 敦 子

◎ 『子どもへのまなざし』

佐々木正美 著／福音館書店 1998

子どもへのまなざし…なんて柔らかくステキな響きでしょう。この本を手取るたびに、今まで関わった大勢の子どもたちの姿やたくさんのエピソードを思い出し、私はひとり頬がゆるんでしまうのです。

子どもは人とふれあいながら育つことが大切であるということをベースに、児童精神科医である著者がさまざまな切り口で語ってくれます。

保育関係者のみならず、お父さん・お母さん、そして、どなたが読まれても心安まるおすすめの一冊です。

◎ 『ちょっとだけ』

滝村有子 さく 鈴木永子 え／福音館書店 2005

なっちゃんのおうちに あかちゃんが やってきました…と始まる絵本です。

お姉ちゃんになったなっちゃんの心を、短い文章と温かな色合いの絵で描かれた一冊です。

毎日の生活の中で“ちょっとだけ”を重ねながら、お姉ちゃんになっていくなっちゃんが何ともいじらしく、思わず応援してしまいます。

◎ 『子どもは子どもを生きています』

小西貴士 写真・ことば／フレーベル館 2013

京都府生まれの写真家、小西貴士さんの写真と言葉で構成されています。どのページも「今、この瞬間！」という子どもの表情がとらえられており、その表情にこちらは大笑いしたり、涙したり、ふと考えさせられたり…。

子どもの気持ちに寄り添える人だからこそその写真の数々です。

なんと愛おしい子どもたち…子どもたちの表情が、見る人々に幸せを運んで来てくれます。

(にながわ あつこ)